

1年生からの自己決定型学習を奨励する： ドイツ語の授業における電子ポートフォリオの活用について

コンスタンティネスク・チェザル

(1) 研究プロジェクトの概要

日本の大学における初習言語の授業は大抵の場合、春・秋学期にそれぞれ15コマないしは14コマと授業時間が限られている。このような事情のもとで、授業の内容を進行状況に柔軟に対応させ、またウェブサイトや動画などのネット上の資料を簡単に授業に取り入れることができる方法を模索した。さらに電子ポートフォリオを利用し、学生が各自の学習記録をつけることによって、彼らが授業時間外に自由に取り組んだ学習を教員が把握することを可能にした。学生にとって新しい学習方法だが、オンラインの資料やポートフォリオを使った学び方について履修者を個別にインタビューし、質的調査によって分析した。

(2) モジュール型オンライン教科書の開発

2021年度には初級のドイツ語クラスにおいて、出版された教科書を一切使わず、実験的に独自に作成した教材やインターネットで自由かつ無料で入手可能な資料を使用し授業を実施した。その際、MoodleとPadletという二つのプラットフォームを用いて、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）のA1レベル相当の内容を扱うドイツ語授業用のオンライン教科書の開発を試みた。トピックや授業の進行に関しては、ドイツ語圏で出版されている教科書を参考にしたが、学習内容を1学期15コマの授業に合わせることで、日本の授業形態に対して適切なフォーマットで提示することを目指した。このコンセプトを授業内容と学習目的の点で同じ3つの授業で応用した。さらに、2022年度は引き続き2つの授業で使用し、秋学期から授業形式がオンラインから対面に切り替わった際にも電子教材の利用を続けた。

2021年度には、ネット上のウェブサイトや動画、授業中の課題や宿題、文法や語彙に関するヒント、そして自分で制作した「ミニ講座」の動画などのコンテンツを毎週適宜追加し、それらの資料で構成されるオンライン教科書を徐々に完成させていった。こうしたプロセスのゆえに、また教育上の理念からも、出来上がった教科書は従来の出版された教科書と比べると不完全とみなされうるものであった、というも文法や語彙の練習問題、単語リスト、文法の解説が含まれていないからである。学習者自身に未完成の部分のを他の情報源から補完してもらう必要があるが、それによってオンラインの辞典やその他の参考資料を適切に活用し、自分の力で継続的にドイツ語の学習が出来るようになることがそこに期待されている。

授業目標は主に、Goethe-Zertifikat A1 : Start Deutsch 1という初級レベルの口頭試験で出される自己紹介の問題に基づき、「名前、年齢、出身地、職業や勉強、住んでいる場所、話せる言語、趣味」といったテーマに関する短いやり取りができるようになることである。また、そのやり取りにおいて相手が言うことを理解し、自分のことを伝え、そして相手に情報をたずねることも望まれる。学生がそのやり取りに必要な文法や語彙を身に付けるため、授業の内容に合った動画やウェブサイトを探し、適切な課題を考案した。ネット上でアクセスできる資料なので、その情報源への

案内にもなり、学生がそれらの動画などのコンテンツを実際にどのように自己学習に使うことができるかをアドバイスした。授業中の課題や授業時間外の復習と予習の課題もPadletに載せた。

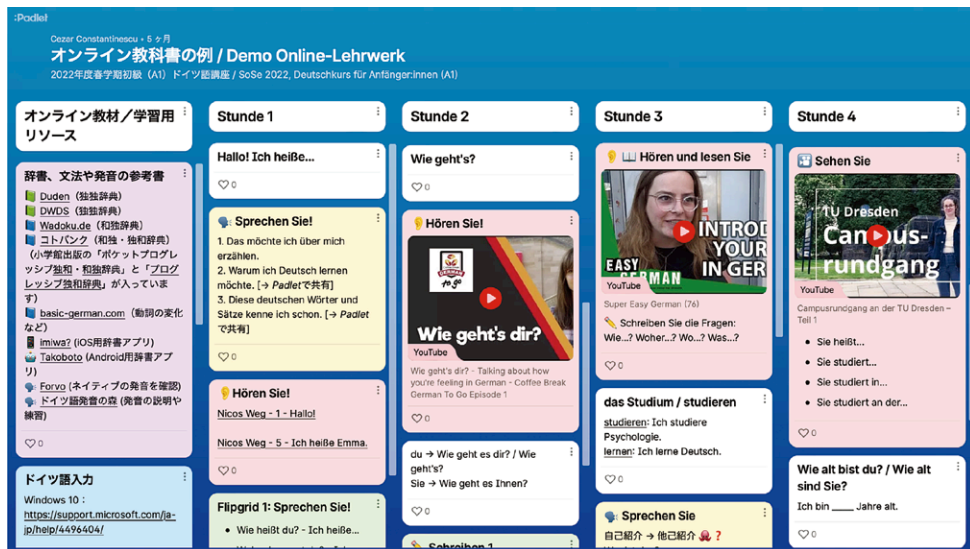


図1：Padlet上のオンライン教科書の例
<https://padlet.com/kon50/demo2022>にて公開中

教科書に利用したPadletのフォーマット（図1）の特徴は、四角い投稿を引っ張って移動できることである。予定していた内容を授業中に取り扱う時間がなかった場合は即時に次回の欄（つまり次回の授業）に持って行くことができる。授業中に説明を追加するなどの編集も容易に行うことができる。

ログイン不要でリンクさえあればアクセスができるPadletに加えて、教育管理システムのMoodle上でもコースサイトを作成した。Padletで長い文章を追加すると全体的に見づらくなるので、追加の解説や課題の説明をそこに掲載した。また学生用のフォーラムなどMoodle独自の機能を使いながら、ネット上での公開が望ましくない資料の提供や課題の提出にも使用した。

インタビューを通して得た、授業資料に関する学生の感想においては、一見して授業の内容を確認できる点が高く評価された。それはまさにPadletの強みであると考えられる。さらに電子資料であるがゆえに、ポートフォリオに追加したい内容を簡単に授業用のPadletやMoodleのサイトからコピー出来るため、復習がしやすいという意見があった。

(3) 電子ポートフォリオの活用

モジュール型教科書の考案にあたって学生の評価方法についても考え直すことになった。言語知識の習得のみならず、自分に合った独自の学習法を身につけるに至ったか、学習に適切な資料と取り組み、継続的なドイツ語学習が成立したかを確かめたいと思ったのである。さらにオンラインで

も対面でも不公平の生じない評価方法を考え、結果としてポートフォリオという形式を選んだ。授業で気になった内容、予習・復習の内容やその他自発的な学習の成果を学生に毎週ポートフォリオに記載してもらった。また、オンラインのポートフォリオであるため、学生による更新が行われると教員がすぐにその内容を確認できるので、課題に関するコメントなどを追加でき、学生と教員間のコミュニケーションツールとして活用することもできる。毎週数十人のポートフォリオを確認する余裕がなかったとしても、定期的に確認して、学生から相談がある場合もすぐに学習内容を確認できるのは大きな利点である。

ただし、文章や口頭で指導したにもかかわらず、ポートフォリオの書き方で悩む学生もみられた。それでも秋学期になると多くの履修者は自分なりのポートフォリオの使い方に「たどり着いた」と確認することができた。どのようなことをポートフォリオに追加するか、自己学習に関してとりわけ何に注力するかによってそれぞれの学び方が明確になってくる。さらに、私からの提案を受けて、ポートフォリオに他のドイツ語の授業で学んだことや取り組んだ課題と自己学習を記録する学生も数名みられた。学生にとってただ一つの授業のためではなく、ドイツ語の学習全体を記録するためのツールにすることができたのは期待以上の結果だった。

(4) 教員としての振り返りと今後の課題

考案した教授コンセプトを2年間に渡って調整しながら使用してきた。私が授業に相応しいと考える資料をその都度教材にして、必要に応じて授業内容をクラスのニーズに合わせて容易に修正することができた。それによって学生にも「面白い」や「楽しい」といった評価をされる授業にすることに成功したと考える。市販の教科書に頼らず学生に無料の教材を提供できることにも満足している。今日、インターネット上には学習に活用することができる資料が無数にあり、その中で教員がそれをより適切に利用し、いかにして効果的に勉強できるかを学生に示すことに価値が見出される。それこそがまさにオンライン教科書の目的である。また、アクセスすることができる資料が豊富にあることを考慮すれば、授業時間外に興味のある内容に取り組むことのできる自主性を学生に認める必要がある。教員はそうした自由な学習の内容ではなく、学生が責任を持って自分なりに勉強することができたということ自体を評価することが望ましい。それがポートフォリオの役割である。学生に与える自由と教員からの指導のバランスに関しては今後も考慮すべき課題の一つである。

今までは学期に一度、各学生と学習全体やポートフォリオの利用について話し合う「ポートフォリオ面談」の時間を設けていた。一人あたり15分という短い時間ではあるが、ドイツ語を学ぶモチベーションや学習に関して不安な点、そして授業への期待を確認することができた。その話し合いから得た情報は授業内容とポートフォリオの調整に活用され、貴重な時間となった。特に、新しいコンセプトを実践する際には学習者との対話が不可欠であり、そのためこれからも学生と話し合いをしながらより適切な教材や教授法を探り続ける。